平成１５年度第２回日本生物物理学会運営委員会議事録
日時：平成１４年１２月７日（土）１３：００～
場所：東淀川勤労者センター　第５会議室

出席者：柳田会長、石渡次期会長、児玉副会長、阿久津、入佐、上田、喜多村、栗原、佐甲、中村、永山、美宅、森島、薬師、各運営委員、垣谷平成１４年度年会実行委員長、河合秘書

（報告）

１　平成１４年度年会総括報告（垣谷）　資料：報１

第４０回年会についての総括報告が垣谷氏よりあった。

参加者数（１，３７９）、演題数（８５５）、懇親会参加者数（４９８）は例年通り。

収入（約１７００万円）はランチョンセミナー（５０万円×９件）のため、前回と比べ大幅に増額した。

支出は、会場使用料―１５０万円、液晶プロジェクタの操作（教映社）－３２万円。年会秘書のアルバイトを専属に。シンポジストへの旅費の支払いを演題につき１～２名とした結果、約３５万円となった。（全員に支払うと約１５０万円と試算された。）また、教映社（液晶プロジェクタの操作）への支払いに関して大幅なディスカウントが可能であった（２５０万円→３２万円）。

余剰金は約３７０万円となった。

託児所に関して担当者（辰巳氏）からの詳細な報告が紹介された。特にインビトロジェンの託児所支援の広告について（他社と結果的に同じ額の支援にも関わらず、託児所支援という特別扱いをされていること）、次回へ引き継ぐよう依頼があった。改善策としては２つの選択肢が提案された。１つ目は２つ分の広告料を受領する。２つ目は広告料とは別に「寄付」をいただく。この場合はインビトロジェン、生物物理学会双方にその体制を整える必要がある。

UMINについての問題点がいくつか報告があった。予稿集作製の際、印刷できなかったため、スキャナーで取り込んでから印刷した。枠に入らない演題を手作業で修正した。登録の際、シンポジウムと一般講演が混ざってしまったので、この区別をはっきりさせるよう努める。

反省会で出た意見が紹介された。会場が分散していたのはやはり不便であった。バリアフリーを意識する必要があるだろう。知的財産所有権について明確な姿勢を示す必要がある。（本年会ではビデオで録画していたという問題があった。ランチョンセミナーでのお弁当代は、年会側が負担したが、次回からは、数の手配については年会が行い、料金は企業が負担するという変更案が提案された。ランチョンセミナーの分、広告代を削減される可能性についても考える必要がある。液晶プロジェクタの使用が一般化しつつあることをふまえて、この件に関して、次回は早めに対応する必要がある。一般発表者は全て学会員であるという原則を守るようにする。一日参加証が好評であった。年会の独自性と運営委員会との連携（緊張感の連携）を確認する。

永山：知的財産所有権についてのＷＧを永山氏を中心に組み、検討することが確認された。

今回の反省点、有効であった点を次回、次々回で引き継ぐことが確認された。

２　平成１５年度年会準備状況（美宅）　資料：報２

平成１５年度年会は神経化学会との合同開催で、９月**23日から25日までの３日間**、ポスター発表とシンポジウムで行われる。会場は、平成１５年４月に新設される、新潟市「朱鷺（とき）メッセ」。費用がかかるが、新潟県から７００万円補助＋ランチョンセミナーで、充分可能である。新設であるため、会場費は未定。５００万円を切るのではないかと予想している。合同ではあるが参加費は同じ。懇親会は、地元のおいしいお米とお酒をたくさん用意する。３日間行い、初日に午前午後ともシンポジウム。２日目から３日目までポスター（最終日まで貼り放し。経費が安価なため可能）。２日目の午後は合同シンポジウム。合同シンポジウムー「分子・細胞イメージ

ングの最前線：神経研究とサイエンスを面白くするために何をどう測るべきか」シンポジスト（敬称略、所属）：柳田敏雄（阪大）、楠見明弘（名大）、猪飼篤（東工大）、寺川進（浜松医大）、長野哲雄（東大）、宮脇敦史（理研）の概要について報告があり、運営委員会で承認された。また、事前にアンケートをとり、それを反映させたい。今回に関しては、幾つか新しいことを含むため、合同開催のシンポジウムについて会誌でお知らせをしたい旨が次期編集委員長の阿久津氏に伝えられた。シンポジウムの公募をメーリングリストで行う。開催時期と神経化学会の意向を反映し、発表の締め切りを６月中旬に設定する。
合同シンポジウムに関して意見があった。
永山：シンポジストの専門が蛍光顕微鏡を用いた研究者に偏っている。
美宅：合同シンポジウムではこれらのシンポジストにお願いをし、その他のシンポジウムで様々な研究分野の研究者にお願いする。
永山：一般のシンポジウムも合同でよいか。
美宅：良い、むしろ歓迎。
児玉：神経化学会にどのような研究者がいるかを把握し、どのような意図でシンポジウムを行うか検討する必要がある。

3　　平成１６年度年会準備状況（森島）

会場係の三木氏（欠席）に代わり、森島氏から会場に関して報告があった。大学を会場とするメリットがなくなってきているので、一般の会議場を利用する。前回の運営委員会で紹介した京都テルサは狭くてよくないので、変更した方がよい。現在のところ、京都国際会議場を考えている。資金面に不安があるものの、名古屋での余剰金があり、また、新潟でも資金が潤沢であると期待できるので可能であると期待される。

日程としては、京都国際会議場の場合、シンポジウム＋オーラルだと、１２月１３－１５日に絞られる。この場合かなり余裕のある会場づくりができる。シンポジウム＋ポスターだと、１１月２９日－１２月１日も候補になるが、他の学会と並行する。ちなみに、生化学会は１０月１３日から１６日（パシフィコ横浜）。分子生物学会は、１２月８日－１１日（ポートピア神戸）。会場費の見積もりはまだ。５００万円以上（７００万円）はかかるかもしれない。ランチョンセミナーでの収入を考慮に入れると不可能ではない。また、総費用が２０００万円を超えると製薬会社を中心とする団体から補助があるので、それを検討しても良いのではないかと柳田会長から意見があった。

平成１６年度年会は京都国際会議場（平成１６年１２月１３日－１５日）で進めることが承認された。

4　３年以上会費滞納者の自然退会について（栗原）　資料：報４

２回の督促にもかかわらず、納金していない会員がある。学会から問い合わせることは難しいので、個々に対応して存続の意志を確認することが提案され承認された。

5　生物物理学研連報告（石渡）　資料：報５

東アジア生物物理シンポジウムに関して。次回（２００６年）、台北（２００３年）の次は日本となる可能性が高い。東アジア生物物理シンポジウムでは、インドを招待するかどうか？オーストラリア、ニュージーランドはどうか？という議論が行われていることが紹介された。この点に関しては報告事項の７に関連する。

研連主催シンポジウムについて生化研連との共同主催のシンポジウムの提案があったことが紹介された。講演者に関して、難波氏と木下氏に交替する訂正案が紹介された。

科研費に関して、キーワードの修正が５年ごとになるかもしれない。科研費の審査員の推薦に

ついての混乱（今年の推薦のリストは公開されなかった）について報告があった。また、細目がいろいろ増えているため、元来の生物物理の細目の空洞化が危惧される。このことに関して、研連委員長である郷氏の（細目に関する）提案が、文科省であまり吟味されずに受け入れられたためであろう、とのコメントが柳田会長からあった。また、科研費の審査員の推薦リストに関しては児玉副会長からコメントがあった。今年の推薦のリストが研連から学会に戻ってきておらず、実際に誰が推薦されたかは研連や文科省から公表されていない。

６　生物科学学会連合第８回連絡会議報告（石渡）　資料：報６

１．国際高等シンポジウム（Okazaki biology conference：仮称）について。この会議は基礎生物学研究所が主体となり、Gordon Research Conferenceを手本とする年１０回程度の専門を絞ったシンポジウムである。
２．科学研究費の問題に関して文部科学省研究振興局学術研究助成課長の西阪氏による回答について。（１）大学院生の旅費について。同伴者、協力者としての運用は認めている（２）４月～７月開催のシンポジウムが助成の対象になっていないことについて。運営が継続していることにできれば可能（３）科学研究費制度について。プログラムオフィサー制度などの設置・学術会議の見直しなど。
３．教科書検定に関して。意見書の提出について。WGに生物物理学会として参加するかどうかが議論されたが、参加しないことで承認された。

７　第４回東アジア生物物理学シンポジウムについて（永山）資料：報７

第４回は台北で２００３年５月２０日から２３日に行われる。２００名程度の参加者で日本からの参加者が多い。インドやオーストラリアを招待するかどうかが議論されている。いずれにせよ主催（第４回は台湾）が積極的に組織する。
また、次回（２００６年）は日本で受けるかどうかが議論された。４年後であるため、若い世代に引継ぐ必要がある。アジアの優秀な若い研究者が欧米に流れないようにするためにも組織や資金サポートをしっかりしなければならない。また、レクチャラーはアジアに限らない方が良いのではないかという意見があった。
明確な使命感を持ってもう少し具体的な素案をまとめ、次回に報告される旨が永山氏からあった。

８　オンライン版科研費アンケート実施状況（入佐）資料：報８

審査員の資料をつくるためのオンラインを用いたアンケートに関して資料のように報告があった。また、このアンケートを実施していくうえで、様々な問題点が浮上してきたことが報告された。
１．サーバー管理、２．会員情報ファイルから電子メールアドレスを切り出す作業、３．会員情報の更新、４．再利用や引継の難しさなど。これらを解消する提案として、１．学会事務センターにこの種のサービスを要求、２．業者に外注、３．人材の確保（雇用）、４．お知らせ用メーリングリストのみボランティアで運営（投稿できる人は一人とする。例：学会秘書）などが挙げられた。学会としてオンライン運営に関して明確な目的を持ったうえで対応する必要があることが確認された。この点は議題１２に関連する。

（議題）

１　次期会誌編集委員長の選出（入佐）

前回の運営委員会での選挙結果をふまえ、阿久津氏が次期会誌編集委員長として承認された。

２　次期会誌編集委員の選出（美宅）　資料：議２

次期会誌編集委員の選出に関して、資料の通りの提案があった。なお、資料に以下のような若干

の変更があった。
平成１５・１６年の編集委員として記載されている大友氏（東北大・工）を平成１５年会誌地区委員候補の東北地区に変更し、平成１５年会誌地区委員候補の東北地区に記載されている樋口氏（東北大）を平成１５・１６年の編集委員に変更。
また、平成１５年会誌地区委員候補の北海道地区：松島氏から、出村誠氏（北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻・助教授・生体膜、ＮＭＲ）に変更。四国地区：頼田氏から、三木洋一郎氏（高知医科大学・助教授・タンパク質の物性）に変更。以上の変更点を加味した新委員案が承認された。

３　平成１５年度分野別専門委員の決定（美宅）　資料：議３

資料に若干の変更あり。A-12. モータータンパク質：石渡氏を柳田氏に変更。それに伴って、A-3. アクチン：御橋氏を石渡氏に変更。
年会の分類・細目に関して垣谷氏より意見があった。発表のない細目も幾つかあったので、もっと実際を反映してみてはどうか？また、細目別の演題数の一覧が予稿集に掲載されていることが紹介された。入佐氏より、編集委員会に分野細目の新設・統合のシステムがあり、過去にその事例があることが紹介された。最後に美宅氏から、幾つかの分野別専門委員が重なっているため、学会秘書に改めて作製依頼された旨が報告された。

４　平成１５年度会誌の印刷部数（入佐）

編集委員会ですでに承認された事項について報告があった。会誌は各号３７７０部（それぞれ年６回）、予稿集４０００部印刷する。

５　平成１５年度会誌表紙・入会葉書の印刷部数（入佐）

表紙は２割増の３２０００部印刷。会員名簿をつくらないため昨年よりも４０００部少ない。
入会葉書：年に一度、会誌一号のみ４０００枚印刷。

６　「生物物理」入会／変更ハガキについて（栗原）　資料：議６

入会／変更ハガキについて以下のような改定案が承認された。１．ハガキにフリガナ欄を付ける。２．学会秘書への電子メールで入会することは取りやめ、オンラインかハガキによる入会のみとする。３．電子メールアドレスの登録を促すために注意書きを加える。４．電子メールの登録は１アドレスとする。５．記入要項にオンライン入会ができる旨を明記する。また、柳田会長から、ハガキの性別欄を（男・女）から（女・男）に変更し、これらを毎年入れ替える案が出され、承認された。

７　第１９期日本学術会議会員推薦について（児玉）　資料：議７

日本学術会議会員推薦管理委員会から柳田会長宛に会員候補者の選定などに関して推薦の延期依頼がされた。例年なら１０人余りの候補者を運営委員会で協議するが、今回は見送ることになった。また、推薦を依頼された際には、柳田会長と児玉副会長で協議し提出することが承認された。また、総合科学技術会議の「日本化学技術会議の在り方に関する」専門調査会による（中間まとめ）に関して、児玉副会長を中心に、永山氏、垣谷氏などから議論が展開した。児玉副会長からは、中村春木氏、郷信広氏、郷通子氏などの意見が紹介され、柳田会長個人からというかたちで提出された「パブリックコメント」の説明があった。その骨子は、１．会員構成に関して、第一線の研究との乖離が起きないよう、２．学協会との連携を強くする、３．研究助成機構に関しても学協会から意見を組み入れる仕組み作りを要求する、ものであった。

8　平成１６年度科研費審査委員候補者選挙について（児玉）　資料：議８

科学研究費助成金の制度が今年度から改正された。今年度は時間の都合により臨時の方法で審査委員候補者を選出したが、次年度以降の候補者選挙の方法を再考する必要があることが、佐甲氏より紹介され、昨年（平成１５年度選挙）と同様に選挙を行うことが提案された。その概要は資料１にあるように、全会員を被選挙者とし２０名連記の選挙を全会員で行い、「生体生命情報学関連」「生物物理関連」「ナノ・マイクロ科学」の３分野に振り分け、順位付けを行う。その後、会長・副会長の合議により最終決定とし、研連委員長へ提出した。

阿久津氏、永山氏、垣谷氏をなどから「まったく何もない状態から２０名を選出するのは難しい」といった意見が出された。そこで、次のような案がまとまり承認された。資料２のような分野・細目をあらかじめ挙げておいて、２０名を投票する。ただし投票の際には、分野ごとの投票は行わない。分野の割り振りは、選ばれた候補者から児玉副会長・佐甲氏を中心に、運営委員会で行う。なお、今回の選挙は２月号で案内し２月２２日を締め切りとすることが承認された。

9　男女共同参画学協会連絡会第１回アンケートWG（児玉）　資料：議９

生物物理学会は男女共同参画学協会連絡会に参加しており、その報告が資料のようにあった。アンケートWGの連絡係を国岡氏（東京理科大）に依頼することが承認された。また、この会議で本学会の年会の託児所が高く評価されていることが紹介された。このアンケートはメーリングリストを使ってメールで行い、本学会で受け付け、転送して処理することが承認された。

10　平成１６・１７年度学会委員候補者推薦について（佐甲）　資料：議１０

資料（議１０）のように若干の変更を行い、また投票用紙が封書からハガキになることが提案され、承認された。２月号で案内し締め切りは２月２２日。

11　レコーダに関して（薬師）

運営委員会の議事録作成のために使用するICレコーダの購入が、事後承諾ながら承認された。

12　その他

美宅氏より、分野別専門委員が重なっているため、河合秘書に改めて作製依頼されたことが紹介された。

編集委員会（入佐氏）より、「生物物理」のe-journal化に関して柳田会長案が紹介された。現行の紙媒体を薄くし、連絡事項のみを掲載する。一方、内容はオンラインジャーナルにする。執筆依頼したレヴューのみという現行から改変し、英文の査読論文（一次論文）を組み込み、議論されてきた「advances in biophysics」と統合し、生物物理のe-journalに一本化して運営する。現行のレヴュー誌機能を廃止する訳ではないことが再び強調された。ライセンス製にし、端末で閲覧できるシステムにすることが提案された。運営委員会ではこの提案を支持することが承認され、編集委員会で発展させ具体的に議論を進めることになった。

また、メーリングリストの運営に関しては、１．メーリングリストの投稿は学会秘書のみとする。２．メーリングリストの更新・変更に関しては年１回とする。という２点に関して承認された。オンラインジャーナル・メーリングリスト・ホームページの運営に関して特別な経費がかかること、PC コンピュータの専門家を雇用することなどが議論された。